

タイヤル（泰雅）族の朗唱の諸相

伊藤 順子

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Aspects of Rosho of the Atayal Tribe

ITO Junko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Even now the Atayal tribe, aborigines in Taiwan, has no written language. Therefore, throughout the centuries their history, moral, rule and wisdom have been transmitted orally. Of all others, they have the special way of oral culture named Rosho. It is not only to sing but to chant. Rosho covers important aspects of the match and the intercession. The tradition of the Atayal tribe is not a mere communication of records. Rosho plays an important function in the real society.

1.はじめに

台湾に住む原住民のタイヤル（泰雅）族は、独特の口頭文化を持っている。彼らは固有の文字を持たないので、彼らの歴史や、規範や道徳、神話などを口頭で伝えることはもとより、縁談を持ち込むときや、紛争の調停の時にも、その口頭文化が一定の役割を果たしてきた。筆者はこの口頭文化を朗唱と呼び、本稿ではこの朗唱の諸相を明らかにしていきたい。

2.朗唱とは

2.1 朗唱の語の選定

台湾原住民タイヤル族には綿々と受け継がれてきた、口頭で伝承する文化がある。中でも特徴的なものに朗唱がある。これは、烏来泰雅民族博物館の資料に「吟唱朗頌歌謠時、音調因無固定旋律、由一個或幾個樂句反復組成、不時作自由的變化發出高低音」（歌謠を吟唱したり朗唱したりするとき、その音調は固定した旋律がないため、一つまたは複数の楽句の反復によって構成され、時には自由に变化させたり、高いまたは低い声を出している。筆者訳）とあるように、歌い手がある一定の節に、その場に合った様々な歌詞を自由に作りながら即興的に吟唱することを意味する。筆者はこれに日本語の、歌う、読み上げる、ふしをつけないでとなえる、（『広辞苑 第

五版』、『日本国語大辞典 第二版』）などの複合的な意味をもつ朗唱の語を充てた。移動・分岐を繰り返しながら台北から台中にかけて広く分布したタイヤル族が、朗唱という風習を同様に持つということはどういう意味をもつのだろうか。

2.2 朗唱の分類

タイヤル族の口頭文化分類の先行研究としては、近年タイヤル人自身による研究が進んでおり、許常恵『民族音楽論述稿』（1992年）では「祭典歌、民族儀式歌、詛咒歌、労働歌、飲酒歌、愛情歌、叙事歌」、陳鄭港（Masa Amui）『泰雅族音楽文化之流變—以大此崙崙群爲中心』（副題は調査地の地名）（1995年）では「非泰雅歌謠・泰雅歌謠、現代的歌謠・古代的歌謠、娯乐的朗誦・正式場合使用的朗誦」、江明清『從泰雅爾族的儀式行爲談 Smyus（祭儀）儀式及其音樂』（2000年）では「吟誦式傳統古謠、一般性歌謠、娯樂、訓誡與吟誦、兒童歌謠」、田哲益『台灣原住民歌謠與舞島蹈』（2002年）では「飲酒歌、工作歌、情歌、祭歌、生活歌、親情歌」など、様々な分類が行われている。筆者はタイヤルの歌謠をまず現代と古代に分け、さらに「旋律流暢の小調式歌謠」と「單聲即興的朗誦式歌謠」¹とに立て分けている陳鄭港の分類を一部援用し、朗唱を以下のように分類する。

朗唱	（唱える）
古訓	（起源神話を含む）
史詩	
儀礼	（歓送迎礼を含む）

朗唱は古訓、史詩、儀礼という特定の事柄についてのみ行われる。特別な内容から格式を重んじ、男性だけが行う場合が多い。また、朗唱を行う場としては、元来祭祀などの正式の場であったものが、近年教育や商品市場という新たな展開を見せている。これについてはここでは置く。

3.朗唱の社会的機能

朗唱の社会的機能については、2つに大別できる。すなわち儀式の場で古訓や史詩により子孫へ部族の歴史や規範を伝えることと、大事な取り決めの場で問題を解決へと導く役割である。

3.1 子孫への伝承

子孫への伝承の典型的な例として、筆者が参与観察した祖霊祭を挙げる。祖霊祭とはタイヤル族の農事の祭儀で、祖霊の一年間の加護に対し感謝する祭典である。小米（アワ）の種植え、収穫及び収穫後などに関する 6,7,8 月頃、部落によって差があるが、それぞれ部落の長老が次時期を決定する。

狩猟で得た獣肉や前日に醸す小米酒、竹で作る祭り用の品、お供え物などを準備する。日本統治時代までは外部者の参加は禁止されていたが、第2次大戦後、参加可能な地域が出てきたり、さらには観光化をにらんだ地域もあるようだ。筆者が参加した地域は、初めて外人の参加を許したところであった。

2008年8月9日、苗栗県泰安郷象鼻村永安部落の祖霊祭前夜、部落の頭目（高春輝 Dali Wasaw 山中竹男という日本名も持っている 1928年3月1日生 81歳）の家の庭先に火が焚かれ、その周りに頭目を中心として部落の主だった人々が集まり、そこで頭目が朗唱を行う。祖霊祭における朗唱は、部落の起源伝説、遷徙過程、部落分布などの部族の重要な記録や、道徳的意義、社会規範を教える祖先か

らの古訓など、部族の構成員として守り伝えていかなければならない大事な心得がその内容となっている。

すでに報告されている調査例から、祖霊祭における朗唱の一例を以下に挙げる。

—テキスト 1— Imuhuw 歌謡（溪口台部落）

Ox nuway sasumubil cikay pinaquyu,
mtoy maku niyux maubah cinaruyan na wagi,
niyux ta minahuyay mbhuyaw mamuqyanux laqi ta kinubahan.

Ox maki qutux riyax ma guwah,
siy tatuliq kmaButa Kakurahu ma guwah.
ox ulaqi mkyala saku cikay ulaqi.

Ox siy ta kaki b'nux Sasubayan qani
ga laqi ta kinubahan ga musa psaquli wagi q hazi
guwah.

Ox aki hahumswa,
musa simu tatubah hmkani pkzikan mamu una zik na balung,
musa tatubah hmakani 'tukan tnga na pazih .
o wayal si kusa kakumayal kmaButa kakurahu ma guwah.

Ox kya babulequn msapapiray kumingulung Cibula ma guwah,
o swa ini kakubalay kwara walsu sa kayal kmaButa kakurahu.

Nway kmaButa tatulamay maku hahumuluy aurqyas na aulaqi,
o hala sami mt'atu atu na agiq.

Ox hala sami sumikusa inwahan la lyus lalaw sal kmaButa,
o wayal si kusa Cibula ma guwah.

Ox sa siy pasasiyaq kmaButa ma guwah,
oa nanu yasa lbalaq ,
ox niyux mamu baqun osa mslabang 'urqiyas na aulaqi.

Ox nuway ma Cibula 'rasay simu sumigagay sasumatu quri Sasuqabu,
o wayal si kusa kmaButa ma guwah.

Matuliq kmaButa kmaAyan kmaYabuh ma guwah,
mtatubalung turu niya kwara aulaqi ma guwah,
minahuyay mbiyaq quri Sasuqabu ma guwah.

Mblaq mthzyu kmglahuy quri Sasuqaba,
musa papuaras mumu sinurhgan,
kmaButa kakurahu ma guwah.

讓我這將要日落的年歲、
傳述一下、後代子孫能夠繁衍興盛至今的史源。

據說有一天、始祖摩武達起身熨：孩子們、
容許我熨件事。

如果我們一直在這發源地(斯巴楊)、繼續生活繁衍、
那麼後代的子孫們、
勢必將要看著天生活了(挨餓)。

是否你們能夠在去另外尋找一塊可以穿梭其間的森
林即可耕鋤之地。

摩武達如此面辭(告訴子孫)。

齊布拉經過周密、反覆地思量摩武達所熨的話。

好吧！齊布拉對摩武達熨：我試著帶領孩子們去尋
找新地、直到山林的盡頭。

我們必循著你(摩武達)刀砍過的足跡尋找、齊布
拉做這樣的承諾。

摩武達很欣慰地熨：這樣很好。你們都知道、這是
爲了我們孩子們來著想、才能繼續發展繁盛。

齊布拉就答應著。摩武達熨：我將送你們到思源啞
口、再與你們分手。

摩武達、摩阿彥、摩雅伯三位帶領者就起身、
成群的子孫就跟隨著他們直到別之地—思源啞口。

大家聚集在思源啞口、離別時、留給子孫們殷切的
訓誡與叮嚀。ⁱⁱ

Lmuhuw 歌謠

私は日が沈もうとしている年齢になっているので、
後世の子孫が繁栄し続けていけるよう、今に至るま
での歴史の源を伝えさせてくれ。

ある日のことだった、始祖 kmaButa が立ち上がっ
て話すには：子供達よ、一つ話させてくれ。

もし我々がこの発祥の地、Sasubayan で生き続け
栄えていくなれば、後世の子孫達は必ずや餓えてし

まうに達しない。

あなた達が、その間をしきりに行き来できるよう
な森を別に探すことができれば、そこが耕作の地と
なるだろう。

kmaButa はこのように子孫に告げた。

Cibula は何度も考え抜いて kmaButa に語った話で
ある。

わかりました！Cibula は kmaButa に言った：私は子
供達を連れて、新地を探し求めて、すぐに山林の果
てまで試しに行こう。

私達は、あなた(kmaButa)が刀で切り開いた足
跡に従って探そう、と Cibula は承諾した。

kmaButa はとても喜んで言った：それはとても良
いことだ。私達は分かっている、私達の子供達のた
めを思うことで、初めて繁栄し続けることができる
のだ。

Cibula はすぐに応じた。kmaButa は言った：私は
Sasuqabu まであなた達を送ったら、またあなた達と
分かれよう。

kmaButa、kmaAyan、kmaYabuh の3人の指導者
が立ちあがった、
彼らに大勢の子孫達が彼らに付き従い新しい土地—
Sasuqabu—に到った。

皆が Sasuqabu のもとに集まって、別れの時、子孫
に懇切に教訓を諭し言い含めた。

(筆者訳)

収穫されたばかりの小米(アワ)で作った小米酒
を飲みながら、長老達の朗唱を聞く祖霊祭の前夜祭
は延々と夜更けまで続いた。このような場で、部落
の人々は祖先の艱難辛苦の歴史を学び、自分達の出
自を知る。また、先祖からの教えを聞き、現実的な
日々の生活における様々な規範を次の世代へと伝え
ていくのだ。この朗唱による伝承こそ、タイヤル族
が祖先から連綿と受け継いだ心性そのものというこ
とができる。

3.2 正式な会の進行

祭儀の場ばかりでなく、出草(首狩り)、提親(縁
談)、調停などの大事な取り決めの場では朗唱によっ

て進められる。祭儀では主に開会の挨拶にみられる。出草もその出陣のときに行われる。本稿では提親と調停に関して概観する。

3.2.1 提親

伝統的なタイヤル族の社会において、近親婚は非常に禁忌な事柄である。神話にも数多くその禁忌が伝えられている。ⁱⁱⁱ古訓にも歌い継がれている。^{iv}このような背景から、提親は重要な意味を持つ。提親を行えるのは記憶力に優れ、徳が高く、智慧があり、善い言葉を巧みに使える古老である。縁談の話を持っていく時、まずそれぞれの出自が朗唱される。その家の所属グループの史詩が朗唱され、両家がどこかで接点を持っていないかを確認する。もし4代前まで遡って関係があれば、その縁談は破談となる。何も問題がなければ双方の老者が数回交渉を続け、成就となる。提親の朗唱とは、近親婚を回避するための智慧ということができる。以下に提親の朗唱を1つ挙げる。

初めて相手のところへ行き、挨拶をして兄弟のように仲良くしようと呼びかけている。

—テキスト2—qwas-rala （見面之歌）

O h'nua lai i suma hai lo
Sin mu la hoi la pi o kalaho
Po tu ga pian su ni
Nux ta ho gai ma gi ta
I ta go ma ta sui
Sau si mu
Na ru bu^v

3.2.1 調停

狩猟民族にとって猟場とは、彼らの生命の糧である。従って各部族にとって猟場の侵犯は、重大な紛争の原因となる。猟場は地図で線引きされている訳ではないので、そこで双方の頭目（代表）が朗唱を以て歴史的な背景をたどり、それぞれの部族の領域の正当性を主張する。すなわち我々は〇〇代前からこの△△山から××川までのところで獵をしてきたのでここは我々の猟場である、といった内容を朗唱に精通した長老が吟じる。このような交渉は非常に

重要なので、朗唱に長けていることは頭目になるための、最も重要な要件である。

それぞれの頭目は、祖先からの伝承を伝え、双方の希望を祖訓に照らし合わせて和解の方向へと進める。しかしながら和解が順調にいかない場合、かつては出草で正邪を判断していた。^{vi}出草が成功するということは、祖霊が加護を与え、正しさを証明したことになるからだ。

以下に大まかな進行を挙げる。

—テキスト3—

Pglen ke'spbaga kma

自己紹介や朗唱したい事柄の紹介。

Pkzyu

先に朗唱する者が、紛争の原因や祖訓をもとに要求の主題を提示する。

Smyuk

後に朗唱する者が、応唱する。

Inlungan ru knita

意見の陳述。

Pmumu ,msuqan ru snoya^{vii}

結論

4. 結語

口頭文化には非常に豊かな人間の所産がある。神話のようなファンタジーもあれば、厳しい規範を子孫に伝えることもある。また、歌垣のように競いあったり、遊びのためにする場合もある。タイヤル族に古来より伝わる朗唱には、部族の大事な規範や道徳を伝えるばかりでなく日常生活の中での問題解決に果たす2つの局面、提親と調停の場での役割があった。朗唱とは、祖先からの伝統や歴史を単なる記録として伝えるだけではなく、タイヤル族の社会の中で実際的な役割を担っていることが確認できた。

このように朗唱には様々な諸相を見ることが出来る。提親における、各人の出自を明らかにするということはまさに戸籍の役割であり、調停において居

住の変遷を辿るとは自分にいたるまでの先祖の住民票の追跡ともいえよう。朗唱は、彼らは何者であり何処から来たのかを伝える。古訓などに内包されるタイヤル族の精神性とともに朗唱は彼らを規定するアイデンティティそのものといえることができる。

-
- i 陳鄭港「泰雅族音樂文化之流變—以大此崙崙群爲中心」國立政治大學民族研究所碩士論文、1995年6月、pp.76-77。
- ii 賴靈恩「泰雅 Lmuhuw 歌謠之研究」國立台灣師範大學碩士論文、2002年、pp.6-9。
- iii 伊藤順子「インセスト・タブーについて」(『比較文化研究』88号、2009年9月) pp.167-169。
- iv 伊藤順子「泰雅族の朗唱の研究」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』9号、2009年、2月) pp.341-342。
- v 陳、前掲論文、p.182。
- vi 賴、前掲論文、p.16。
- vii 鄭光博「Sm'inu puqing kinhulan na Tayal (懷念、遙想泰雅故鄉的根源)」國立政治大學民族學研究所碩士論文、2006年7月、p.64。

参考文献

- 巴義慈編『泰雅爾語初級本教材 1, 2』南天書局有限公司、2000年。
- 多奧・尤給海・阿棟・尤柏斯『泰雅爾語讀本』泰雅中會母語推行委員會、1991年。
- 森丑之助編『臺灣蕃族志 第一卷』臨時臺灣舊慣調查會、1918年。
- 黃俊傑『台灣意識と台灣文化』臼井進訳、東方書店、2008年。

(Received: December 31, 2009)

(Issued in internet Edition: February 8, 2010)